
愛のある器

立花葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛のある器

【Nコード】

N1935Z

【作者名】

立花葵

【あらすじ】

神様、生まれ変わっても、あたしをあいつの妹でいさせて下さい。恋人じゃなくて、友達でもなくて、妹。永遠に切れない絆で結ばれていたい。いつまでも、何度でも。あたしという命の塊と、あいつの命の塊が許される限り。

1. 運命

「依子、俺、結婚するから。」

平日の、しかも仕事中の昼休みに珍しく電話が来たかと思ったら、結婚かよ。何事かと焦ってしまったじゃない。この時間の電話に、他の人だったら、絶対に出ていない。いつもいつも、兄・徹也からの電話はロクな内容じゃなかった。そう、二十歳を過ぎた頃からは、確実に悪い知らせばかりだった。怖くて着信音を聞こえないふりしてしまおうか、とか、気付かなかったことにしようか、とか。何度も目を背けようとしてきたけれど、結局あたしは電話に出てしまう。あたしが徹也の電話を出なかったら、徹也は壊れてしまうんじゃないかって、自意識過剰なのか、ブラコンなのか、シスコンなのか。いつまで徹也のこと心配しながら生きていかなければならないのかと思ってた。だから、ちょうど良かった。結婚したら、落ち着いてくれるだろうし。あたしのことも、きっと必要なくなる。ちょうど良かったじゃない。

なのにどうして、こんなにも胸が締め付けられて、涙が溢れてしまふんだろう。徹也の馬鹿。二度と心配なんてしてやるもんか。

「今日の昼休み、徹也から電話来たよ」夕飯を食べながら、あたしは親にそう伝えた。「あら、珍しい。お兄ちゃん、なんだって？」あ、そうだ。まだ親には言うなよとかなんとか言われてたんだ。「お前に、一番に報告したかったんだ」とか。嬉しくない。嘘、嬉しい。どっちだよ。

まだ、あたしがなんらかの“特別”である気がすることは嬉しい。

「さあ、なんか報告したいことがあるようなこと言ってたよ」

「え？何なのかしら。また変なこと言い出したら、どうしよう」

どれだけ信用ないんだ、徹也。気の毒だけど、ちょっと笑える。今までの徹也の行いが招いた結果なのだろう。当然だ。そんな徹也が、あたしに言って聞かせた言葉は、「親には迷惑かけるなよ」だった

気がするけど。

「そんな変な感じじゃなかったよ。心配するようなことじゃないと思う。」

「ふうん、ならいいんだけど。徹也は本当に、依子のことが好きなのねえ。なんだかんだ、あんたに連絡してくるんだから。依子も迷惑よね。ふふふ。」

迷惑なんかじゃない。徹也と同じように、あたしも徹也のことが大好きなんだもん。誰にも言えないし、誰にも言わないけれど。

「ご馳走様。」

徹也が結婚する。徹也が選んだ最後の女と、そのお腹に宿った命を抱えて、結婚する。

徹也が24歳で、あたしが23歳の夏に。

徹也とあたしは年子ってやつだ。5月生まれの徹也と、3月生まれのあたしはほとんど2歳離れているようなものだけど、学年は1つしか違わない。小学校も中学校もずっと一緒だった。小学校の頃、徹也への記憶はあまりいい思い出がない。

いつもからかわれたり、うざがられたり。一緒にゲームをやっているけど、下手くそなあたしとじゃつまらないみたいだし、格闘ゲームなんてやったら、集中攻撃されて、あたしは最終的に泣いて喚いた。「泣くぐらいなら、お兄ちゃんと一緒にゲームなんかやらなきゃいいでしょう！もう、二人ともゲーム禁止！！」

母親にそう言われても、結局次の日にはまた一緒にゲームをしていた。

あたしはずっと徹也にくっついて歩いてきた。徹也の背中を必死に追いかけてながら、徹也の背中ばかりを見つめて育ってきた。

2. 中学生

「高藤徹也くんの妹なんだよね？ねえ、お兄ちゃんって家でどんな感じなの？」

成長するにつれて、いわゆるイケメンと言われるようになった徹也は、学校でも目立っていたみたいで、注目を浴びていたようだ。

その妹が入学したという噂はあっという間に広がって、あたしは入学してすぐに“徹也の妹”のレッテルが貼られた。おかげで先輩達から可愛がられたりもしたけど、別に心地いいものでもなかった。

むしろ、徹也と同じ年で、徹也をアイドル的感觉に見ない2年の先輩達は、ちゃんと“高藤さん”と扱ってくれるのが気楽に感じられた。

あたしはテニス部に入部して、それなりに厳しい部活ではあったけど、テニスがどんどん好きになったし、1年生のキャプテンをやったり、友達ともそれなりに楽しく過ごしていた。3年生の先輩達は、「依ちゃん、依ちゃん」って呼んでくれて、特別扱いしてくれた。

たまに「依子いいよねー。かっこいいお兄ちゃんのおかげで、先輩たちに可愛がられてさ。あたし、“ちゃん”付けて呼ばれたことなんてないし」と言われた。その度に胸が痛んだ。

徹也がいるから、こんなふうに言われるんだ。いや、徹也が悪いわけじゃなくて、徹也に近付きたくて必死な女の子達が、なんとかあたしから何かを得たくてそうさせている。残念ながら、あたしからは何も出ないんだけど。それに、徹也はきつとそんな女を相手にしないだろう。あたしに取り入らなくても、徹也と付き合う女は知らないうちに徹也の隣にいるのだから。でも、あたしから徹也の存在を取ったら、あたしも“依ちゃん”じゃなくて、“高藤さん”になっていたんだろう。必死で、“徹也の妹”やらなくちゃって思うのが、たまに辛い。そして、悲しい。まだ中学生のあたしは、徹也に八つ当たりをしてしまった。

「徹也がお兄ちゃんのせいで先輩達が可愛がってくれるから友達に嫌味言われるじゃん！」

「は？ そんなの知らねえよ。むしろお前、得してるんじゃないの？ お前のこと妬んで嫌味言うような友達ならやめちまえ。俺がお前の兄貴なのはしょうがないだろ」

「それはそうだけど・・・」

「お前のこと、本当に好きな友達ならそんなこと言わないのが普通だよ。お前、その子のこと好きなの？」

好きなの？ と聞かれて、うんって言えなかった。そういや、同じ部活の子ってぐらいで別に大して仲良くないや。仲良い子からはそんな嫌味言われたことないし。

もしもあたしが徹也の妹じゃなくて、友達に嫌味言われない人生と、徹也の妹で嫌味言われる人生を選べるとしても、あたしは徹也の妹がいいって思った。例えば友達が一人もいなくなってしまうても、徹也はあたしを見捨てたりしない。

「あんまり考え込むようなら、3年の女にも言ってやるよ。俺の妹に俺のこと聞き出そうとするのはやめろ。気持ち悪いって」

いや、それはむしろやめて欲しい。クソ妹とかって藁人形とかで呪いかけられそうだし。てゆうかさ、ちょっと先輩達に同情しちゃうよ。

「んーん、いい。何も言わないでね。ありがと。あたしお兄ちゃんの妹でいる」

徹也は嬉しそうな照れたような変な顔で笑った。学校じゃ絶対見せない顔に、あたしはくすぐったくなってしまった。徹也のこの笑いが、あたしは大好きだって発見した。

いつも通り部活を終えて帰宅する。夏は、日が長いから部活の時間が長い。そのうえ友達とずっと立ち話をしてから帰るから、家に着くのはだいたい8時ぐらい。この頃から、あたしは家に帰るのが憂鬱になっていた。

玄関のドアを開ける。何足も並べた靴を見て、項垂れる。「やっぱり・・・」

今日も来ている。徹也の友達。

「ただいまー」二階の徹也の部屋からの笑い声で、あたしの渾身のただいまがかき消された。なんとも不愉快。

「あら、依ちゃん、お帰りなさい。遅かったのねえ」

「ゆうちゃんとかと話してたから。それより、夕飯何？」

「今日は豚肉の生姜焼きだよ。手、洗ってらっ『ぶはははは！徹也馬鹿だろ！』・・・」

ドンドンと音が響く。「手、洗ってくるね・・・」
はあと深いため息を漏らさずにいられない。

「ここんとこ毎日、徹也の友達来るね。結構うるさいんだけど」

「まあね。でも、みんなちゃんと挨拶もしている子達よ。今日はホラ、あんたも徹也と小さい頃よく遊んでいたヒデくんが来てるよ。

昔近くの借家に住んでたじゃない？今は学校の近くに引っ越したみたいだけど。覚えてる？」

「ああ・・・あの、（ヤンキーみたいな）秀明くんね」

夕飯を食べ終わり、自分の部屋に入る。

あたしと徹也の部屋は、昔一つの子供部屋だったのを、アコーディオンカーテンで仕切って2部屋にしていた。声や音なんかは全部筒抜けだ。

部屋の電気を点けて、宿題と、友達同士で回し合っている交換日記を取り出す。どんなこと書いてあるんだろう、好きな子との発展はあったのかな？なんてうきうきしながらノートをめくろうとすると、徹也の部屋から声がする。

「あっ、徹也。依ちゃん帰ってきたんじゃない？俺、ちょっと挨拶してきていい？」

「えっ、ヒデずりいじゃん。俺も行くー」

いいよ！来なくていいよ！ほっといてくれていいんだよ！

「あー、いいけど。依子に変なことするんじゃないぞ」

変なことって何？徹也がいなくちゃ、変なことする人達なの？てゆうか来る！こっちに来る！さっと交換日記を隠して、宿題を開く。コンコンコン。「……………はい、どうぞ」

「依ちゃん、こんばんわー。あつ宿題？真面目だねえ、徹也の妹なのに。俺、秀明。覚えてる？」「えっ依ちゃん、俺のことは？」

「覚えてるよ、ヒデくんでしょ。そっちは正輝くん」

「うんうん。依ちゃん、ガキの頃一緒に遊んでたのも覚えてんの？」

「……………覚えてるよ。ヒデくん、カミキリムシに指噛まれて泣いたじゃー「あーそれ言わないで！恥ずかしいから」「あははは！ヒデ、それマジ？」

「マジだよ。依子、よく覚えてたね」あ、徹也。

「徹也は来なくていいよ。俺、依ちゃんと喋るし。なんで来るんだよ？お前はいつも依ちゃんと喋れるんだからいいじゃん」

「お前ら依子に変なこと教えそうだから嫌なの！もう挨拶終わったなら部屋戻るぞ！」

ちえって言いながら、依ちゃんまたねって皆部屋に戻っていった。

徹也の友達で、あたしの部屋まで覗きに來たのはヒデくんが初めてだった。あたしは見た目がとってもヤンキーなヒデくんが苦手だった。

陰で徹也のこといじめてるんじゃないかと思ってたし。幼馴染だけど、小学校の頃はあまり一緒にいたイメージがない。学校でたまに二人を見かけても、水と油みたいに見えていたから、正直ビクリした。仲、良いのかな？徹也、脅されて家を溜まり場に利用されてるんじゃないかな。とか有り得ないことまで考えてしまいうぐらいに。

ヒデくんや、その他の友達が帰った後、徹也に正直に聞いてみた。

「ねえ、秀明くん久しぶりだったね。仲、良いの？」

「ヒデは幼馴染みたいなものだし、仲良いよ。お前、ヒデ覚えてたんじゃないの？」

「覚えてるけど、今もお兄ちゃんと仲良いと思わなかった」

「あはは。あいつはなんか悪そうな見た目してるけど、付き合い長いせいか、やっぱ一番信用できるよ。お前のことも、本当の妹みたいに思ってくれてるしな」

本当の妹……。 「ふうん、そうなんだ。じゃ、いいや。もう寝るね」

「なんだ、ソレ。お前、なんか心配してんの？」

「心配してたけど、良かったみたいだから、大丈夫になった」

「はは、馬鹿。俺が付き合う友達はちゃんとしてるよ」

あたしの大好きな徹也の笑顔が見れた。その言葉通り、徹也は本当に友達に恵まれていた。きっとそれは、徹也の魅力なんだと思う。徹也はものすごく優しいから。あたしも、徹也みたいになりたいって思った。徹也みたいに笑いたいって思った。

その願いは別の形で叶うようになるのだけど、本当に一緒になりたかった笑顔は、こんな顔じゃなかったはず。だけでもう、きつと上手く笑えない。だから徹也の、嬉しそうな照れたような変な顔の笑顔は、永遠にあたしの宝物。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1935z/>

愛のある器

2011年12月19日21時46分発行